『圏論—原著第 2 版—』（Steve Awodey 著，前原和寿 訳） 正誤表

■初版 3 刷

ページ	行	誤	正
第 2 章			
38	10	0 と $0'$ がただ一つの同型射である	0 と $0'$ は一意的に同型である
第 7 章			
191	9	$\mathbf{C}$ を伴う準同型写像 $\mathrm{End}(X)$ の集合は合成で	$\mathbf{C}$ を自己準同型写像の集合 $\mathrm{End}(X)$ として合成の下で

■初版 2 刷（初版 3 刷では修正されています）

ページ	行	誤	正
第 1 章			
7	7	$x \le y$ または $x \le y$	$x \le y$ または $y \le x$
第 2 章			
35	↑ 1	m はエピ射	エピ射
38	8	対象	始対象（終対象）
〃	9	対象	始対象
40	6	圏 $\mathbf{BA}$ おいては	圏 $\mathbf{BA}$ においては
49	9	結合変数 (binding variable)	“変数の束縛 (binding of variables)”
50	9	（c に x はない）	（b に x はない）
〃	13	恒等式：	恒等射：
52	8	推論の注釈付きの規則	注釈付きの推論規則
53	↑ 3	終対象の	三項積の
54	5	積にすべき対象が存在しなくても，射をもたない一つの対象 1 が存在し，他の任意の対象 X を与えたとき，射を与えなくても，何も可換にすることのない一意の射	積の対象が二項ともない場合を考えると，付随する射影のない一つの対象 1 が存在し，他の任意の対象 X を与えたとき，X から項への射がなくとも，積の定義図式の可換性は自動的に成立し，一意の射
59	↑ 12	$\mathbf{C}_{A,B}$ が終対象をもつならば A と B の積が $\mathbf{C}$ に存在することを示せ．	A と B の積が $\mathbf{C}$ に存在することと $\mathbf{C}_{A,B}$ が終対象をもつことは同値であることを示せ．
第 3 章			
61	4	また正しい文章となる	また文法的に正しい文となる
64	9	$A \cong \{a_1\} + \{a_n\} + \cdots + \{a_n\}$	$A \cong \{a_1\} + \{a_2\} + \cdots + \{a_n\}$
65	4	表現可能であると	表現可能であり，そして積を保つと
66	10	証明の恒等命題を射とみるとき恒等射とするので	証明が同一のとき，射として同一とするので

□初版 2 刷（つづき）

ページ	行	誤	正
第 3 章（つづき）			
77	8	余等化子を	余積を
〃	11	とった等化子	とった余等化子
〃	13	余等化子となる	余積となる
〃	18	の等化子は	の余等化子は
79	↑ 6	自由代数間の余等化子	自由代数間の写像の余等化子
80	↑ 9	ε は TM の乗法として使われ，μ は M の乗法として使われる．	ε は TM の乗法を使い，μ は M の乗法を使う．
82	↑ 5	余積として	余等化子として
〃	↑ 3	**Sets** のすべての等化子を得る	**Sets** はすべての余等化子を得ることを証明せよ
83	7	ということ示せ	ということを示せ
〃	12	与えらえれた	与えられた
〃	13	同値関係は一致する	同値関係は N 上で一致する
84	↑ 3	開集合は $q^{-1}(V) \subseteq Y$ が開集合と	開集合であることと $q^{-1}(V) \subseteq Y$ が開集合であることが必要十分条件と
第 4 章			
89	↑ 9	アーベル群である．	アーベル群であり，また任意のアーベル群も群の圏における群となる．
90	7	基礎の圏が半順序集合 P であるような例は，交叉 $x \wedge y$ と結合 $x \vee y$ の演算を含み，（P がこれらの構造をもつと仮定して）	基礎となる圏が半順序集合 P であるような例として，（P がこれらの構造をもつと仮定して）交叉 $x \wedge y$ と結合 $x \vee y$ があり，
〃	10	これは，成分ごとに順序づけられた単調写像 $f : P \to P$ の半順序集合 $\mathrm{End}(P)$ について $\otimes$ を合成 $g \circ f$，単位元を 1_P とするのと同様である．	単調写像 $f : P \to P$ を成分ごとに順序づけることで得られる半順序集合 $\mathrm{End}(P)$ について，$\otimes$ を合成 $g \circ f$，単位元を 1_P とするとまたその例となる．
〃	15	さらに一般的な強モノイダル圏，つまり多くの対象と射をもつ全うな圏をもつ圏は	つまり多くの対象と射をもつ全うな圏をもつ強モノイダル圏の族は
〃	↑ 5	モノイド積 $m \otimes n$ は単位元であり，これより $m + n$ と 0 は	そしてモノイド積 $m \otimes n$ は $m + n$ であり，0 は
91	7	完璧ではない	完全ではない
第 6 章			
162	↑ 8	A について変	A について反変

□初版 2 刷（つづき）

ページ	行	誤	正
第 7 章			
187	3	対称と	対象と
201	↑ 5	動機づけれらる	動機づけられる
207	3	共変関手	反変関手
第 8 章			
212	↑ 9	$G \to \mathrm{Aut}(\lvert G\rvert) \subseteq \lvert G\rvert^{\lvert G\rvert}$	$G \rightarrowtail \mathrm{Aut}(\lvert G\rvert) \subseteq \lvert G\rvert^{\lvert G\rvert}$
〃	↑ 1	$M \to \mathrm{End}(\lvert M\rvert) \subseteq \lvert M\rvert^{\lvert M\rvert}$	$M \rightarrowtail \mathrm{End}(\lvert M\rvert) \subseteq \lvert M\rvert^{\lvert M\rvert}$
213	9	$\downarrow : P \to \mathrm{Low}(P) \subseteq \mathcal{P}(\lvert P\rvert)$	$\downarrow : P \rightarrowtail \mathrm{Low}(P) \subseteq \mathcal{P}(\lvert P\rvert)$
練習問題の解答			
322	↑ 6	導入と消去の規則により，自動的にその選言肢のどちらかからの余積の，そして，各々の選言肢から始まり，選言肢から始まる単独の証明に入る証明の対からの写像（証明）が与えられる．	導入の規則により，それぞれの選言肢から余積への写像（証明）が自動的に与えられ，そして，選言の消去の規則により，各々の選言肢から始まる証明をもとにして余積から始まる単一の証明が自動的に与えられる．
323	3	選言肢の消去	選言の消去

■初版 1 刷（初版 2 刷以降は修正されています）

ページ	行	誤	正
序			
iii	9，12，14，15, 19	半群	モノイド
第 1 章			
10	10	全順序	前順序
第 10 章			
307	11	もつ	保つ
訳者あとがき			
343	8	プリンストン大学のアドバーススタディ研究所	プリンストン高等研究所
〃	↑ 4	アウディの	アウディと

最終更新 2017.9.21